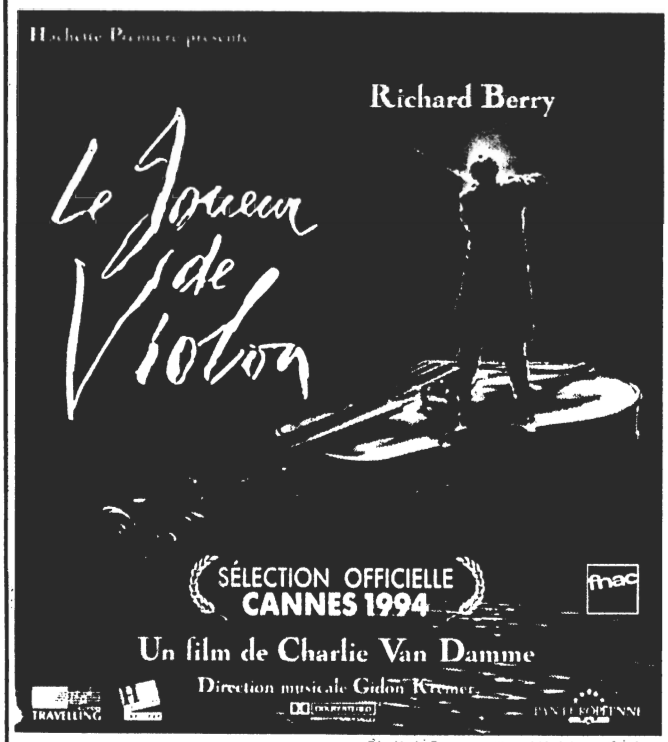
‘ὁ κόσμος, ἀλλοίωσις· ὁ βίος, ὑπόληψις.’

101号 1995.7.10

文・編集・発行

恋 怪子

MOVIE：無伴奏／シャコンヌ



『無伴奏「シャコンヌ」』オリジナル・ポスター

なぜアルマンはソリストとしての腕がありながら地下鉄駅構内で一人ヴァイオリンを弾きつづけるようになったのか。それは、

「当時はまだ、自分の演奏様式を確立できず、聴衆のウケを狙ってバッハを弾いてました。テクニックを磨くことだけに夢中だったんです。でも、すべて捨てて基本に戻りました」

ということだからであり、この映画の監督シャルリー・ヴァン・ダムが、

「私の主人公の『ヴァイオリニスト』は、今日でもなお聴衆に感動を与えることができるのかと考え再出発するのです」

ということだからである。そして、アルマンはついに、音楽を真に心の糧とすることができる人々の前で『シャコンヌ』を弾き、人々はほんとうに、

「彼の音楽を聞いて幸せになり、争いを止め、物を分かち合うような気持ちになる」

のである。

この映画のすばらしさも、ギドン・クレーメルのヴァイオリンのすばらしさも、うんちく自慢の閉鎖的なクラッシック愛好者（ファン）じゃないほうがまっすぐ感じとれるかもしれない。そういうふうに開かれている映画である。

●監督・脚本
シャルリー・ヴァン・ダム
Charlie Van Damme

私は音楽をテーマにしてギドン・クレーメルと仕事をしたいと思っていました。というのは、音楽自体がテキストみたいになっていて、レコードから映画のために音楽を借りてくるのではなくて、ギドンが映画のために演奏してくれることを望んでいたのです。

「私はある種の物語をはらんでいるような音楽を求めていました。例えばベートーヴェンのヴァイオリン協奏曲ですが、出だしは言ってみればとてもメカニックで単純です。私が欲しかったのは、コンチェルトの終わりのところです。そして、その前にカデンツァがついていることが必要でした。つまり、カデンツァが終わりのすぐ前にあるということです。この映画では二分前にあります。そしてまた、私はクラシック音楽のヴァイオリニストが大胆なことを行なえるような、ちょっと特殊なカデンツァも必要だったのです。それがシュニトケのカデンツァなんです。

私はそれに決めて手を加えました。映画のなかのカデンツァはレコードのものとも違いますし、楽譜のものとも違います。私が手を加えたというのは、それがストーリーを展開させ得るようなものでなければならなかったからです。ストーリーは簡単で、リハーサル中にソリストが即興で弾き始め、次第にオーケストラをひっぱっていって、それが協奏曲になるというものです。

ですから、音楽を選ぶのは、いつもそのようにしてやりました。音楽だけのことを考えてのことではありません。音楽とドラマの視点からの選択です。で、ときにはレパートリーに私が必要としているものがないときには作曲家に依頼してシーンに合ったものを書いてもらったのです。停電の場面とか、オーケストラ全体が即興演奏する場面がそうです。

現代の作曲家が直面している大問題は、一般大衆との接触を失ってしまっているということです。芸術家と大衆は分裂しています。大衆芸術は死に、商業芸術となってしまっています。私の主人公の『ヴァイオリニスト』は、今日でもなお聴衆に感動を与えることができるのかと考え、再出発するのです。人々が彼の演奏を聞いて幸せになり、争いを止め、物を分かち合うような気持ちになることを願うのです」

●アルマン
リシャール・ベリ
Richard Berry

映画でのギドン・クレーメルの演奏がすばらしいので、CDを3枚買って聴いてみた。監督が「レコードから映画のために音楽を借りてくるのではなくて、ギドンが映画のために演奏してくれることを望んだ」、「（音楽を選ぶのは）音楽とドラマの視点からの選択です」といっているように、CDは映画とは演奏の色合いがだいぶ違う。

●音楽監修・演奏
ギドン・クレーメル
Gidon Kremer

To the audience of
„Le Joueur de Violon" –
I hope this film is going
to make you feel and
understand better the
importance of Music in our
Lives...
May 95

To the audience of
"Le Joueur de Violon" -
I hope this film is going to make you feel and understand better the importance of Music in our lives.

苦行にヴァイオリンを練され、テープを流しながらヴァイオリン集しで弾くアルマン

「ヴァイオリンの習得はもう大変でほとんどお手上げ状態だった。」と本作を振り返るベリ。しかし毎6時間、数カ月間特訓を重ねたうえ、一弓に平均17テイクも撮るという並々ならぬ苦労が見事な演奏シーンとして結実。「クレーメルが演奏した『シャコンヌ』に合わせて私が『シャコンヌ』を弾く。私はクレーメルの演奏の中にいるのです」撮影は夏、暗闇のメトロで行われた。「私はアルマンの生活を実体験しました。通路で寝たり、赤ワインをラッパ飲みしたり……」

LIVE：P J HARVEY　1995.6.15,6.19　新宿リキッドルーム

フランスの思想家ジャン・ボードリヤールはその著書「透きとおった悪」のなかで、マドンナを「エアロビクスと冷淡でよそよそしい美学の成果であるマドンナは、一切の性的魅惑と官能性を取り除かれた、筋肉の発達したアンドロイドであって、だからこそ、人工的なアイドルとなることができた」と評し、マイケル・ジャクソンを「マイケル・ジャクソンこそは孤独なミュータント、普遍的であるがゆえに完璧な異種交配の先駆者、諸人種のあとに出現した新人類なのだ。現代の子どもたちは、人種混合型の社会に拒否反応を示しはしない。それこそは彼らの世界であり、マイケル・ジャクソンは、子どもたちが理想の未来として想像する世界を先取りしている」と評している。

マドンナもマイケル・ジャクソンも世界規模のアイドルであるにもかかわらず、私はその存在が実感できたことがない。歌もどこかで何回も耳にしているにちがいないのに、どんな声でどんな歌を歌っているのか全然知らないし、ポスターや写真も何度となく目にしても、それがマドンナとかマイケル・ジャクソンだってわかるだけで、なんにも感じないから好きにも嫌いにもならない。それが不思議でならなかったが、ボードリヤールを読んでそのわけが分かった。2人ともアンドロイドであり、ミュータントであるからなのだ。人工の産物だからなのだ。

世界が、「子どもたちが理想の未来として想像する世界」が、そんなふうになっていくのだとしたら、およそ人工的なものからほど遠いP J HARVEYはそのなかではどこに位置することになるのであろうか。異端者？　革命家？　魔女？　なんの仕掛けもないステージで「THANK YOU」と「アリガトウ」を言う以外、あとは静かに歌うだけのP J HARVEY。その美しい歌声は、シンプルだけど実に豊かな演奏にのって、どこまでもどこまでも届いていきそうな重い存在感があった。

ライブがよかったので新しいCD『To Bring You y Love』はすぐ買ったが、「シンプルなバンド・サウンドでの極みを見せた前作『RID OF ME』に続いてリリースされた新作『To Bring You y Love』で、それまでの3ピース・スタイルのバンド編成を解体し、完全なソロ・アーティストとなり、真摯かつしなやかな世界はそのままに、より自由に静寂と深みを増したサウンドを手にいれた」と書いてあるチラシを読んで『RID OF ME』も買った。2枚ともよかった。